全国同人雑誌評

●**「木木」**（佐賀県）32号

この誌は、扉の「秋蝉や砲弾の跡鯱の門」の巻頭句で始まっていることに象徴されるように、趣が深く、主宰者の林絹子氏の細やかな風合いが全体に息づいている。その作品「生還」も情感のゆるやかな流れが、体の異変の底に快く波打っている。緊急の体の変化を描きながら、なお命の流れをやさしく見つめている確かな眼がある。「人の肉体は、いかに多くの動作を行い、いかに多くの動きを持つことができるか、それを行う脳の指令が、神経という線を通して、体中に張り巡らされていて、ひとつの素晴らしい機能を持つ世界を作りあげている。……生まれながらの、この素晴らしい機能。だれが作ったか、どうして出来たのかわからぬ、素晴らしい一つの出来上がった個体。神が作りた給うたという言葉が浮かぶ」という素直な感動を、脳梗塞による入院生活の中で抱く叙述にも、趣の基礎となる細やかな感性が息づいている。準優秀作。

巻頭小説の「火鈴」（木山葉子）は、主宰者の文章の細やかさを受け継いだ文体で、趣の深いいい旋律を奏でている。旅館の料理人の転々と職場を変える流れ者の人生の、

根を失う流浪感と転落の気配が、陰の韻律を深めていて、文章の味わいを深く大きくしている。彷徨う生の足元を何かが脅かすように吹き抜けていく。「風鈴の音が鳴り響き、避けようとしても避けられずに佇む恭司の足を、生き物の感触が素通りして行くのがわかった」というような優れた描写が随所にあり、達意の手腕であることが知られる。

妻のゆき子を捨てて、情欲に溺れるままに目の前の女と駆け落ちしていく顛末は頽廃の色を濃くして、どこまでも転げ落ちていく人生のきわどさをよく反映していて、そのスリルがこの世界を支えている。「捨てた者に用はない。捨てられた者にもこちらに用はないだろう。そういう思考で浅はかに、盲目に前に進んでゆかねば世間など渡ってはゆけない。それに、無謀もいいとこだ。駅のホームで、寒空に流れる暗雲を見ながら、自分の中から滲み出る感情に無防備に、右手で女の腕を掴み取ったのだった。そういう

非道をやってのけた男が、今さらあれこれ弁解する余地などないし、破れ目からどんどん何かが広がってゆくのを見たくない」この流浪転落の途中に聞こえてくるのが、前の生活の名残りとして聞こえてくる貝殻の風鈴の音色で、そのかそけさが、虚しさとはかなさをいっそう呼び起こしてくるその過程がいい。ただ、結末が、愛人との破局の後に、妻へその音を頼りに回帰するのは、ややあっけない。妻が流浪の果てのその地に暮らしていたという終息は、ストーリーの終息としては頷けても、小説の終息としては物足りない。むしろすべてを失くしたその後に、妻の死を知らされ、風鈴の音だけが残るようにしたほうが、流転と人生の深さは象徴できたかもしれない。この文章の力量には感心させられるだけに、最後が惜しまれる。優秀作。

●**「遠近」**（東京都）72号

「妹」（小松原蘭）は、精神の破綻していく妹の姿を、自分たちの生い立ちを振り返りながら、その生の寝に迫っていく展開で、迫真力に満ち、最後まで一気に読ませる。「死んでやる」「殺してやる」という絶叫や、妹の狂った言動が、生活を脅かすと同時に、何か生の根源に向かう鋭さを孕んで、息苦しい緊迫感で最後まで引っ張っていく。その遡及の底に、愛に飢えた子供の頃の姿が重なり、それが人生への愛の空転となって、破綻の深さを覗かせる。それはそのまま人生の深さでもある。この妹の姿には、狂った怪

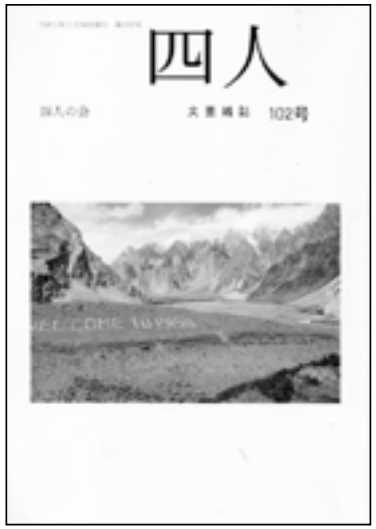
物としての輪郭と同時に、壊れて行く過程での生身の人間のか弱さとせつなさが納得できる形で賦与されているために、いっそう愛すべき人間の悲劇の結末が露わになる。破綻し壊れていく人間のせつなさとその声が読後も残るところに、作品の存在感がある。最後の「『がんばろや妙子』いぜんとして刃先をむけている妹に言った。『私らは幸せにならなきゃあかんのや』」もインパクトのある終わり方でいい。ただ、「妹」というタイトルが一般的すぎて、もう一つ焦点が結びにくい。タイトルはみな苦労するが、もっとふさわしいタイトルがありそう。優秀作である。

●**「四人」**（東京都）102号

すでに一〇〇号を超えているこの誌は、誌名のシンプルさからは及びもつかない知性の豊饒さを備えている。学識

者や社会的ポジションの高い位置の人たちが、横溢する趣味を余技で発行して楽しみ合っているように見える。いったいどういう人たちなのか、あまりの広範な知性に、圧倒される。まず表紙の写真が尋常ではない。パキスタンのフンザ渓谷の解説があり、写真家でも行かない土地である。カラコルム山脈云々とあって、よほど人類学など専門的に研究移動している人でないと撮れないはずである。目次もぶっきらぼうで、ただ並べればよいという素っ気なさだが、「十七歳の詩」とか「サイゴン」とか短歌二十首とかのなかに、「GHQ」とか「デルフォイの神託」とか「金五両」とか、枠に収まり切らない飛び跳ねたはみ出しがあって、それが誌全体の特性を表しているように見える。

巻頭の「鳥と蛇を追って」は、この誌の編集発行人でもある山本悦夫氏の読みやすい論文だが、三五ページにわたる長さを、長く感じさせず、理屈の煩わしさを削った、紀行文の流れのよさを伴って、最後まで興味深く読ませる力は、ただ者ではない大きなインテリジェンスを感じさせる。東南アジアではよく知られている怪鳥ガルーダと蛇神ナーガを軸に論は展開し、インドのマハーバーラタの神話やメソポタミアの石杯、アイルランドの鳥と蛇、中国の龍と鳳凰など、四大文明やヨーロッパまで、全地球に調査と思考は及び、文明の起源からさらに進化の根にまで遡及する。広い教養と鋭い洞察に裏付けられたその知性の翔りは、壮大な規模で、人類史を被い尽くす。いままで、同人誌でこのような壮大な思考を巡らせた文章は読んだことがない。同人誌という場を離れても、成立し、普遍性を持つ説得力がある。筆者は「人はなぜ『鳥と蛇』に特別な思いを寄せるのだろう」という結論部分で、その進化の過程において「原初につながる鳥や蛇を畏敬する感情は私たちの下意識よりさらに奥深く体内に組み込まれているようです」と結んでいるが、その当否はともかく、進化の過程での脅えと憧れにまで起源を遡る種としてのトラウマへの洞察の深さには、驚嘆する。これは特別作というべきだろう。私自身も大きな学びを得た。



この誌の「東京密林」（伽藍瑞香）は、東京へ出て来た宿無しの若者のつい殺人を犯して新宿のゲイの世界に紛れ込む、都会の享楽世界の喪失性を描いているが、それなりの展開力はあって読ませる。かなり本質にも肉薄していて、

要領よく読者を引っ張っていくが、やや「ありそうな世界」に留まっている観がある。この世界の仮面性を描き暴くには、もう一歩の踏み込みが必要なように思われる。純優秀作。この誌は本来こうした評価は必要なくむしろ拒否という立場を取るのかもしれないが、こちらの率直な感想は感想としたい。

またこの誌の後半部は気賀健介氏が七〇ページ以上をランダムな題で書いていて、この気ままさが不思議な魅力を醸している。残すべき蔵書とその思い出の記録もあり、折々に経験した備忘録とも取れるその乱脈が、奇妙な存在感を持っている。こういう、書きたいもの、残すべきものをそのまま打ち出すことが、同人誌の一つのあり方、楽しみ方をも示している。

●**「姫路文学」**（兵庫県）133号

「姫路文学」も一三三号で、驚きである。一〇〇号を超えた誌はそれだけで顕彰に値すると思われるが、今の日本にはそういう仕組みがないのは、返す返すも残念である。

ここに載せられた作品群には独特の趣があり、歴史という長い時間を遡行し、蘇らせながら現在との交錯を彩る風合いに手触りのいい織物に触れるような感触がある。「経正冥界行」（千田草介）もその趣を備えた作品だが、一の谷で討ち死にした平経正の足跡を追ったこのストーリーは能の世界や霊や亡者が錯綜して、一種独特の空間を現出する。経正の生と死の機微に触れる幽冥のドラマは切迫力があり、鮮やかな再生を見せるが、全体に夢の迫真力に留まっているのは、古典に依拠し過ぎていて、現在の側のドラマと重ならないためかもしれない。準優秀作と見る。

「止まり木」（藤保君子）はスナックで働く女性の生活人生をよく汲み上げていて、抱える問題ややるせなさを的確に描いている。離婚をして、しかも引きこもりの十七歳の息子と暮らす母親の、酒場での仕事をカメラで追うように書いていて、そのリアルさは、よく迫ってくる。以前そこで働いていた女性が乳癌になって訪れたりする場面も一側面を浮かび上がらせて、この世界で必死に生きることの哀愁を引き摺っている。客との応対や、経営側の女性の本音や気遣いが露わになってスナック空間の構造がよく浮かび

上がってくるのは、書き手の手腕だろう。それが人生のある真実と結びついて、人生の構造の陰の部分に繋がって見えるところに、この筆者の力量が窺われる。ただ、最後に息子が独り立ちを決意して出ていく段になって「私の人生返してー」と泣き崩れるのは、主人公の魅力が削がれ、結末を安っぽくしている。残念ながら準優秀作に留まる。

この号で最も読み応えがあったのは中島妙子氏の「椎名麟三（七）二つの不思議――『ほんとうの自由』とキリスト者」である。椎名麟三という野間宏と並んで第一次戦後派の代表格とも言えるこの作家に、これだけ現在でも焦点を当てて書き続ける情熱は、それのみで称讃に値するが、ここに繰り広げられる筆致は、確かで、率直な疑問と作家の実人生に沿って解明を進めていく手際は、吸引力がある。別れて住む父親に援助を頼みに行って拒否され、そのまま家出する経緯や、母親の自殺や、生きるために何でもした少年から青年への苦闘や、共産主義に走った過程や転向の事情など、戦前に生き抜いた一個の人間存在が、最後にキリスト教に入信するその到達と屈折を導いて、読者を牽引していく。その掘削力と導きの流れは、説得力があって、評論としての分析力を示している。ただ、これは連載のせいか、これだけでは十全な解明に到達していない、何かが残る。キリストに父親像を重ねるそこには、もう一つ何かがあるのではないかという可能性を払拭できない。これはすでに他の部分で書いているのかもしれないが、キリスト教という世界の向こう側に入ってしまっている存在を、こちら側からの解明として十全に行うのはかなりの腕力が必要かもしれない。推薦作としたいが、全体は長いので、部分に留めたい。

●「詩と眞實」（熊本県）850号

この八五〇号という気の遠くなるような発行数には驚嘆する。月刊で七〇年の歴史があるということは、日本で最長の同人誌の一つと言えるだろう。称讃に値する。心から祝福を送りたい。この号はしかも三〇〇ページという堂々たるボリュームである。寄せられた回顧の声に重みがある。平成二十八年の熊本大地震の時は存続を危ぶまれたとあり、それを乗り越えての継続はいっそう尊い。九〇〇号、千号をめざしてさらにがんばっていただきたい。

小説もエッセイも詩も多彩だが、中で目を魅いたのは「フラワー」（宮本誠一）という寓話小説である。「フラワーが破壊された」から始まる抽象世界の広がりは、何を象徴しているのか、探求欲をそそられて、引き込まれる。植物世界なのか、種族なのか、人間の集団なのか、よくわからないままに異界に導かれていく。「フラワー」の世界そのものが曖昧なところへ、それが破壊された新勢力の世界へ踏み込んでいくのだが、新奇な風景や人物たちによって開かれる「ハニカム」という世界がもう一つわからない。「ハニー」という天使を想わせる若い女性たちのもてなしとケアーが、桃源郷の趣きを見せて、老人の安楽死世界を構築しようとしているのかとも邪推するが、その目的もあり方も明確に伝わってこない。前半でせっかく雰囲気作りには成功しているのに、背後の異世界の構造がよく見えてこないところに、不満が募っていく。これは着想のよさに溺れてしまって、その新しい世界の全体および細部の構築が不十分なまま、筆を進めてしまった結果のように想われる。「フラワー」の世界構造と、それを「破壊した」新世界の構造をしっかり造った上で筆を進めて行かないと、途中で手が間に合わなくなるだけでなく、破綻しかねない。終り近くになって、天使の羽をはずした若い女性たちが雇われの立場の不平を漏らし合うところなど、せっかくの虚構がぶちこわしになっている。寓話は、現実の何に批判の刃を向けての象徴なのか、それをはっきりした上で書き進めるべきだろう。せっかくの着想が、水泡に帰している。熟考してもう一度筆を起こしてほしい。準優秀作。

今回は長く続いた伝統同人誌の奥に触れることができた気がして、充実感があった。

今回をまとめる。

特別作「鳥と蛇を追って」山本悦夫「四人」102号

優秀作

「火鈴」木山葉子「木木」32号

「妹」（小松原蘭）「遠近」72号

推薦作

「椎名麟三（七）二つの不思議――『ほんとうの自由』とキリスト者」中島妙子「姫路文学」133号

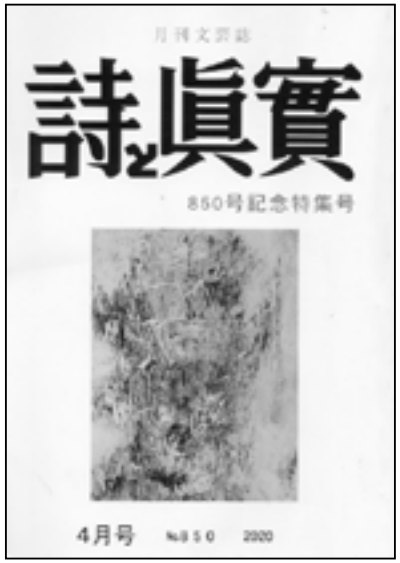
準優秀作

「生還」林絹子「木木」32号

「東京密林」伽藍瑞香「四人」102号

「経正冥界行」千田草介「姫路文学」133号

「止まり木」藤保君子「姫路文学」133号

「フラワー」宮本誠一「詩と眞實」850号

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）